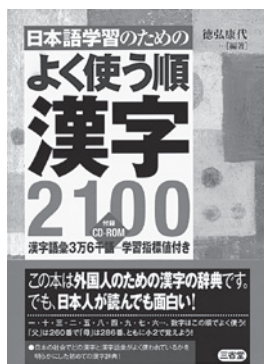


書 評



徳弘康代著

日本語学習のためのよく使う順漢字 2100

付録 CD-ROM

漢字語彙 3 万 6 千語—学習指標値付き

三省堂、2008 年発行、511p

ISBN : 978-4-385-14073-5

吉田 雅子

一般に書評といえ、新刊の書物に対して行われる内容紹介や論評などを指すものと思われるが、今回の書評は、2008 年に出版された徳弘康代著『日本語学習のためのよく使う順漢字 2100 付録 CD-ROM 漢字語彙 3 万 6 千語—学習指標値付き』に対して行うものである。出版後、すでに 7 年あまり経過しており、新刊の書物としての紹介にはならない。

本稿は、1 早稲田大学に提出された博士論文との内容比較、2『漢字 2100』の内容について、3 日本語教育に貢献できると思われる点、4 この研究の今後の課題、5『日本語学習のためのよく使う順漢字 2100』と関連する出版物の 5 点に分け、若干のまとめを行う。

1 早稲田大学に提出された博士論文との内容比較

2006 年に早稲田大学大学院日本語教育研究科に提出された著者博士論文のタイトルは「日本語教育における中上級漢字語彙教育の研究」であった。論文全体は 4 章からなるが、日本語教育に貢献できる点として、博論審査報告書は次のようにまとめている。

- 1 15000 語という大量の漢字語彙の選定を行ない、これに学習指導値をつけることで、教材化が容易になった。
- 2 単漢字の提出順について考察した。言語の基礎的研究と現場をつなぐ成果である。
- 3 同音語を調査し、同音語の数と同音語組内の語数との関係を数式化した。モーラ音素がアクセントに影響を与えていることについて統計的調査により明らかにした。これは漢語の発音練習のための基礎資料として役に立つ。
- 4 漢字とその語彙についての学習法への心理学理論の応用が試みられた。

1 と 2 に関しては、その成果は『漢字 2100』につながる。3 と 4 に関しては、本書とのつながりは少ない。さらに、報告書は、若干の不足として、次の 4 点を挙げている。

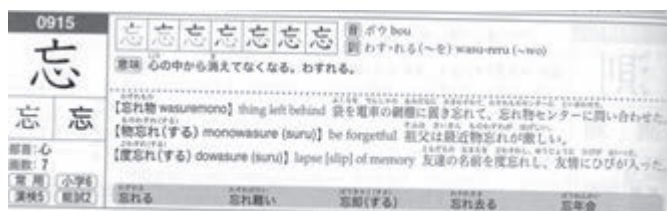
- 1 第 2 章で、中上級語彙の選定を行っているが、漢字の筆順、部首、訓読みなどの索引もあると良い。使用者側からの使用案が示されることが期待される。
- 2 全体では、漢字教育は語彙教育であるという前提で、研究が行われているが、漢字

教育と語彙教育との関係が検討されていない。また、留学生を対象に作成したとされているが、新聞記事のデータと親密度のデータを統合したものであり、学習目的との関連が弱い。

- 3 専門領域に入る前の段階であるとの説明があったが、最近では初級から専門との橋渡しをするという動きがあり、それについては触れていない。
 - 4 「モーラ音素脱落対表」として論文末についている表は、日本語教育にどのように応用するかについて具体的に示されていない点が惜しまれる。
- 不足点として挙げられた3と4に関しては、本書との関係は若干薄い。

2 『漢字 2100』の内容について

まず、「この本を使う人たちへ」、「この本の使い方」によって、書物の形が予測できる。一つの漢字を細長いカードに載せたものを想像していただきたい。それが、5字ずつ、左右に見開きになっている。仮に留学生が、毎日少しずつ勉強するとして、一日10字は、目標にできる数だと思われる。



《漢字番号 915》

漢字番号は、1 から 2100 まで、新聞の漢字頻度、親密度のデータ（『NTT データベースシリーズ日本語の語彙特性』三省堂を総合して出した順位）を基準にして提出順位を決め、それが番号である。つまり、順位決定に使用した資料は、著者独自のものではないことになる。しかし、それらを利用させてもらいたいという着想に独自性がある。あえて難点を言えば、親密度や使用頻度というものは常に変化していくという点である。

漢字は教科書体で書かれ、辞書を引く場合を考え、明朝体とゴシック体も添えてある。部首と画数、教育漢字か、常用漢字か、小学生で習う学年と漢字検定、能力試験の級数も表示されている。さらに筆順が明示され、音、訓の読み、さらに意味がついている。内容は、簡潔で丁寧である。次に単語が3つ、そこに英語の訳が付けられている。そのあと、例文が添えられており、言葉の意味解釈に重要な役割を果たしている。最後に例文に採られなかった語彙が5個あげられており、意味の広がり確かめることができる。

例えば、966 の「療」は、意味は「病気をなおす」、単語は「治療」(する)「診療」(する)「療養」(する)の三つがあげられているが、下に「医療」「療法」「化学療法」「荒唐治」が載っている。967 の「抱」は、意味は「両手で包むようにかかえる。だきかかえる。抱く、心に思う」があげられ、単語は「抱く」(だく・いだく)「抱える」「辛抱する」、

例文のつかない単語は、「抱き合う」「抱き合わせ」「抱え込む」「丸抱え」「抱き込む」が出ている。

巻末には、「2100 字に含まれる常用漢字外の漢字」、「2101 位以下の常用漢字と日本語能力試験出題漢字」、「漢字の知識」、「語数の多い漢字」、「CD-ROM の使い方」、「練習問題」、「索引」がついている。この中で「漢字の知識」は、1.1 拍について、1.2 促音化、1.3 連濁など、仮に漢字の授業で資料として使えば、多くのテーマが役に立つと思われる。説明もついており、15 回の授業で使用するのに適量である。書き順の説明に「永字八法」が使われているが、起筆や力入れ具合を説明するときには有用である。筆順とともに役に立つ「語数の多い漢字」では、頻度及び親密度で順位付けした 3000 の漢字が約 15000 語の中にどれくらいの語を持つかが調べられており、順位の高いものは総じて語数が多いという事が分かる。漢字順位が高く語数も多い漢字は、日本語教育では初級に学習する漢字である。著者は「漢字の初級と中上級にあるギャップを埋めるには、習得漢字数だけでなく、既習漢字を含む語彙量を増やさなければならない」としている。漢字の学習は、漢字量をこなす作業に追われがちだが、「漢字の語数を考慮に入れた提示順や提示方法が語彙習得に良い影響を及ぼす」としているのは、大変示唆に富んでいる。

また、「CD-ROM の使い方」は、教える側の教師にとっても大変ありがたい。

漢字	読み	品詞	漢字	読み	品詞	漢字	読み	品詞	漢字	読み	品詞	漢字	読み	品詞	漢字	読み	品詞	漢字	読み	品詞									
一	いち	数詞	二	に	助詞	三	さん	数詞	四	し	数詞	五	ご	数詞	六	ろく	数詞	七	しち	数詞	八	はち	数詞	九	く	数詞	十	じゅう	数詞
...	

《表記・読み・品詞・頻度・親密度》

特に 5「データ活用例」を見ると、一例として、漢字教材を作る時にその漢字を含む語彙を調べることができる。漢字指標値を調べれば、重要度が分かり、その結果を利用すれば練習問題が作れるというのも、便利である。仮に「経済」に関連した単語を集めて、その中の重要度を調べることも可能になる。

さらに、語彙の概念地図を作成することによって、概念の近い言葉をあつめ、重要語を選べば、独自の教材を作ることができ、それを使用したテストを作ることにもできる。つながる言葉を空欄にしておけば、授業中のタスクとしてドリルに使うことも可能だ。「練習問題」は 150 字ずつに分けて作られており、15 回の授業を計算に入れて、実質 14 回の漢字テストで全体を学習することを考えれば、各々 150 字平均になる。読みと書きの問題が用意されているので、時間が無ければ、どちらかを使用しても良い。実際に使ってみると、漢字の多さにはびっくりしながらも、出題漢字の範囲が毎回定められているので、学生のやる気は出るようだ。

「総画索引」と「50 音順索引」は、部首が分からない場合や、読みや送り仮名が不確かな時に、手っ取り早く確かめられて便利である。例えば「以」が人偏の 5 画、「比」

は部首が「比」で4画だという事がすぐに分かるようになっている。



《言葉の地図》

3 日本語教育に貢献できると思われる点

著者は、漢字は語として覚え、文中で適切に使えることを漢字教育の目標としている。この観点からいえば、漢字教育は語彙教育でもある。漢字は表意文字であり、造語力もあり、音符のつく形声字も多い。「五」が読めれば「吾」や「語」や「悟」などが読め、「流」や「涙」、「湖」、「河」からは「水」が連想される。「必要」「需要」「要求」「要望」から「要」の意味が理解できる。これらを効率よく覚えるために『漢字 2100』は作られている。このように、語彙教育に役立つことが内容面からの利点である。一方、使用面からの利点を考えると、外国人の日本語学習者が使用すれば、使用頻度の高い語を効率よく学習でき、教員が使用すれば、授業準備のために語彙の必要性等が確認できる。学習漢字の難易度を知することは、漢字学習という山登りの位置が確認でき、学習者にとって、やる気を引き出すことになる。これまで、特定のクラスで使用されていたものが、出版によって、多くの学習者のために役立ち、教える側にも多くの手助けをもたらす。これらが、本書の日本語教育に貢献できる点だといえる。

4 この研究の今後の課題

本著『漢字 2100』に対して何かを望むとすれば、漢字カードの余白に漢字の簡体字、繁体字、ハングルなどを入れることだろうか。それが可能ならば、学習者の誤字防止につながるだろう。また、報告書にもあるが、「モーラ音素脱落対表」を『漢字 2100』の巻末に足せば、学習者の読みや発音の練習に役立つと思われる。

本書と著者の博論はその関係から、どちらも「この研究」の範疇に入ると思われるので、次に、博論に対して若干述べることにする。

博論第3章において、著者は「大量の同音語を作る働きは、日本語の重要な特性である」と述べているが、この特性については詳述されていない。さらに、第4章で、「ことばの記憶と概念の記憶は別のもので、第二言語の場合、母語との単語どうしの対応で習得する。そこで連想させることで語数を増加させるのが効果的である」としている。同じく第4章で「自分で文をつくり主体的に言葉を使い、語彙の定着を図り、取り出しやすくする、つまりイメージを膨らませて、語彙を増やす」と述べている。これらの方法は、評者も参考書作りや中等教育の作文指導において類似した方法を用いた経験がある。それらとの類似点を考慮に入れると、著者が主張している方法が、日本語漢字教育に特化した方法とはいえないように思う。また、国語教育での語彙習得と日本語教育での語彙習得の差を、博論において強く主張していない。もう少し拘ってもよかったのではないだろうか。さらに、著者は「一個の漢字を部品として分けて研究することはしなかった」と述べている。しかし、漢字は表意文字であり、そのことが漢字習得の手助けにもなる。そこを出発点にして、漢字の語源、日本漢字音など、漢字全体をまとめたうえで、関連する漢字習得法を論じてよかったのではないかと思う。その方が、筆者の「効率よく漢字を覚える」という主張に、より説得力が増すからだ。つぎに、報告書にもあったが、「漢字教育は語彙教育である」としながら、如何に役立つかについての論は展開されていない。また、利用頻度の高い漢字が必ずしも覚えやすい漢字だとは限らない点についても言及されていない。

5 『日本語学習のためのよく使う順漢字 2100』と関連する出版物

『日本語学習のためのよく使う順漢字 2100』は2008年の出版である。2010年に徳弘康代監修『語彙マップで覚える漢字と語彙中級 1500』がJリサーチから出版された。2011年に徳弘康代編著『日本語学習のためのよく使う順漢字 2100 問題集』が三省堂から出版されている。これは、本書に対応した問題集で、同音異義語などにも言及している。

さらに2014年、徳弘康代編著『日本語学習のためのよく使う順漢字 2200』が同じく三省堂から出版された。この書は、常用漢字が改定されて100字増えたことにより、改められたものである。提出順位にも変動があり、「インターネット日本語サイトの漢字の出現頻度を調査したデータを中心に用いて順位付けした」としている。因みに漢字順位一覧を比べると、『2100』の最初は「日、一、大、年、中、会、人、本、月、長」、『2200』の最初は「日、一、大、年、中、人、会、月、本、上」となっている。さらに1000位で比べてみると、『2100』では1000位「涙」に続いて「了、齡、候、更、袋、催、捜、暮、免、像」の順であるが、『2200』では、同じものは見当たらない。能力試験の級数も、N5からN1までの基準に変えられている。『漢字 2200』の巻末には、「2201位以下の常用漢字と日本語能力試験出題漢字」と「練習問題」、「漢字の知識」がついているが、CD-ROM はついていない。2015年には、徳弘康代監修・著で『語彙マップで覚える漢字と語彙 1400』が出版され、『日本語学 2015、4』では、漢字指導法について詳しく述べられている。

6 まとめ

この本は、実用漢字辞書兼学習書というべきだろう。総じて、著者の留学生に対する熱意の書といえる。学習書としては大部であるため、自習するには負担が大きい。また、教授する側から見れば、便利な工具書でもある。

参考文献

徳弘康代（2014）『日本語学習のためのよく使う順漢字 2200』三省堂

徳弘康代（2015）「日本語教育における漢字教育」『日本語学』（明治書院）（p126-137）

（よしだ まさこ 早稲田大学日本語教育研究センター）